

クリ責め選手権出場♡

穴あきパンツ×クリフック×クリ
チャームで羞恥競技にチャレンジ！

1

五月の昼さがり、ランチを終えたわたしたちはまだカフェのテーブルに居座っていた。

友達が、アイスコーヒーのストローをくるくると回しながら言った。

「ねえ、クリ責めビギナー大会、出てみなよ」

わたしはフラペチーノを飲もうとして、手を止めた。

「……何それ」

「クリ責め選手権。知らない？ フェムログが主催してるやつ。ビギナー部門だから普通のカップルでも出られるし、観客ありで友達も応援に行けるんだよ。来月開催でまだエントリー間に合うって」

フェムログ。女性向けのウェルネスメディアで、SNSのフォロワーが確か三百万人以上いたはずだ。おしゃれな性教育コンテンツや、フェムケア商品のレビューで有名な。

「……出るわけないじゃん」

「なんで？ 最近普通の子も出てるよ。婚活のステータスになってるって記事読んだ」

「いや、そういう問題じゃなくて」

わたしは苦笑いをした。「ゆうくんにそんなの頼めないし。無理だよねw って感じじゃん」

友達は「そう？」と首を傾けた。「山下くんって優しそうじゃん。向いてると思うけど」

そのまま話題は流れた。お会計をして、外に出て、駅で別れた。

地下鉄のホームで電車を待ちながら、わたしはスマートフォンで「クリ責め選手権」と検索していた。

クリ責め選手権が日本に入ってきたのは、たしか二〇三〇年代の初めごろだったと思う。もともとはアメリカ発の文化で、クリトリスへの愛撫と絶頂に関する技術と芸術性を審査するという、なんとも直球な競技だ。日本では最初、日本クリ責め連盟という団体が公式大会を仕切っていたらしいが、二〇四五年のいまは雑誌社やフェム系ブランドが独自に開催するものも増えて、かなりカジュアルに参加できるようになっている。

プロ選手が出るような本格的な大会から、今回みたいなビギナー部門まで裾野は広い。上位入賞者には賞金が出るし、「魅力的なカップルである」という証明になるとして、インフルエンサーや美容系の仕事への登竜門になっているケースもある。

婚活のステータス、というのも満更嘘ではないらしかった。「クリ責め選手権の出場経験あり」がマッチングアプリのプロフィールに載っていると、「パートナーを大切にできる人」として評価されやすいという記事を、わたしは電車の中で三本読んだ。

参加者の層も変わってきているとあった。もともとはグラビアアイドルやセクシー系モデルが中心だったのが、最近是一般の会社員や学生カップルも珍しくないという。親世代からは今でも眉をひそめられることが多いし、わたしの母親に言ったら卒倒するだろうなと思う。でも、二〇四五年の感覚でいえば、選手権への参加は「リベラルで開かれた関係を築けるカップル」の象徴みたいなものになりつつあった。

わかってはいた。

わかってはいたけど、自分が出るというのは別の話だ。

わたし、花宮ことは、二十三歳、営業事務。彼氏ができたのは生まれて初めてで、まだ付き合っただけ二ヶ月しか経っていない。

その夜、雄太から電話がかかってきた。

山下雄太。二十六歳。ITのスタートアップでエンジニアをしている。出会ったのは共通の友人の集まりで、告白されたのは三回目に会った日の帰り道だった。

付き合い始めてすぐ気づいたのは、この人はとにかく急かさないということだ。次のデートの計画も、距離の詰め方も、全部わたしのペースに合わせてくれる。それが最初は少し不思議だった。もっと積極的に来るのかと思っていたから。でも今はその静けさが、わたしには心地いい。

声は落ち着いていて、電話越しでも雄太だとすぐわかる。

「ことちゃん、こんばんは。今日はどうだった」

「普通かな。お昼に友達とご飯行って」

「そっか」

しばらく他愛ない話をして、わたしはなんとなく言ってみた。思ったより自然に口から出た。

「……ねえ、ゆうくん、変な話なんだけど」

「うん」

「お昼に友達に言われてさ。クリ責めビギナー大会、出てみなよって。そんなの無理だよねw って感じなんだけど」

少し間があった。

「え」と雄太が言った。「でも俺の周りの友達、結構出てるよ？」

わたしは固まった。

「……え、そうなの」

「うん。去年出たやつが二人いる。楽しかったって言ってたけど」

想定していた返事と全然違った。「そっかー無理だよね」って笑って流してくれると思っていた。

「ことちゃんが嫌なら全然いいけど」と雄太は続けた。「俺はありだと思う」

ありだと思う。

その四文字が、なぜかしばらく頭の中に残った。

「……ちょっと考える」

「うん」

それだけ言って、電話は終わった。

お風呂に入りながら、わたしはまた検索した。

フェムログのビギナー大会のページを開くと、過去の参加者レポートが並んでいた。写真付きで顔出ししている人もいれば、匿名のテキストだけのものもある。読んでみると、思ったより普通の人たちだった。「付き合い始めのカップルです」「緊張したけど行ってよかった」「彼のことがもっと好きになりました」。

会場は観客ありのステージ形式で、友人も観覧チケットを購入すれば応援に来られると書いてあった。審査基準は「クリ絶頂までの時間と技術」「クリ性感における芸術性」

「カップルの関係性・空気感」の三項目。上位三組には賞金と、フェムログの公式 SNS での紹介枠が与えられる。

ステージ形式。観客あり。

普通に考えたら無理だ。知らない人たちに見られながら、雄太に触られて、声を我慢して……想像しただけで顔が熱くなった。

でも、なぜかページを閉じる気にならなかった。

(私って、えっち、なのかな…。)

翌朝、雄太から LINE が来た。

「昨日のやつ、エントリーページ見てみたら来月の 15 日だった。締め切り今週末みたい」

わたしは思わず赤面する。調べてるじゃん、と思った。

「どうする？」

スマートフォンを持ったまま、しばらく考えた。

嫌かと聞かれたら、嫌じゃない。クリトリスがちょっと疼く。

わたしは返信を打った。

「……エントリーしてみる」

既読がついて、すぐに返事が来た。

「わかった。申し込んどくね」

それだけだった。「よかった」も「楽しみ」もなかった。でも雄太らしいなと思って、わたしはもう一度少し笑った。

大会まで、三週間ある。

2

エントリーを済ませた日の夜、雄太がわたしの部屋に遊びに来ていた。ソファで隣に座り、テレビのバラエティ番組をぼんやり見ていた。

「ことちゃん」

雄太が画面から視線を外して言った。

「大会って、どんなことすると思う」

「え……審査基準見たよ？ クリ絶頂の技術とか……」

「そっか。じゃあさ、俺たち、経験値が少ないと大変じゃない？」

うっ。的を射た。

「…まあ、そうかも」

「練習、しない？」

「え、練習？」

わたしの顔が赤くなったのは間違いない。練習。クリ責めの練習。何をどうするんだ。今までセックスしたのが三回。雄太はわたしのクリトリスを直接触ったことがない。せいぜい布越しになぞったり、キスをしたりしただけだ。

「でも、練習って…何すればいいの」

「そうだなあ」雄太は少し困ったように考えた。「これまでやったことないこと、してみる？」

「…どんなこと？」

雄太はわたしの顔を見て、ちょっと照れて笑った。普段は滅多に見せない、彼の表情だった。

「クンニ、とか」

…クンニ。

あれは、男性が女性の局部を口で愛撫すること。セクシー雑誌やエロ漫画で見たことはある。でも、現実のセックスでやったことはない。恥ずかしさの前に、想像がつかなかった。

わたしの反応を見て、雄太は慌てて言った。

「いや、もちろん嫌なら絶対やらないから。ただ、審査がクリトリスへの愛撫だと思うんで。そういうの含めて…って思っただけ」

「…」

わたしは黙った。雄太の顔を見た。彼は真剣だった。笑って冗談を言っているわけではなかった。ただ、大会のために、ベストを尽くしたいと思っている。わたしのために、そう考えている。

その静かな真剣さに、わたしはなんだか弱気になっていた。

「…やる」

思わず、そう言ってしまった。

「…でも、ゆうくんがやるのは初めて…？」

「うん。俺もだよ」

雄太は静かに頷いた。「でも、やりたい。ことちゃんがどんなふう気持ちよくなるか、ちゃんと見たい」

彼の言葉が、わたしの胸の奥をじんわりと熱くした。

(ゆうくんのために…。でも、自分も少し、怖い…。でも、だからこそ…。)

雄太はわたしの手を取って、優しく握った。彼の手は大きくて、指先は少し粗いが、温かった。

「どうする？」

「…やる」

小さく首を縦に振った。雄太の目に、喜びが浮かんだ。

「うん。じゃあ…」

彼はゆっくり立ち上がって、わたしの腕をそっと引いた。ベッドルームへ。カーテンは閉められていたが、夜の明かりが薄い帯状に差し込んでいた。部屋にはベッドのフレームの木の質感と、柔らかい布の感触だけが浮かび上がっていた。

「こっちで」

雄太はベッドのシーツの上に、わたしを優しく寝かせた。頭が枕に沈む。わたしは緊張で、呼吸が浅くなっていた。雄太はわたしの隣に膝をつき、俯いた。彼の黒髪が、わたしの頬を掠めた。

「緊張してる？」

「…うん♡」

「大丈夫。俺がいるから」

雄太はゆっくりわたしの服を上げていった。薄いカーディガン、それから下のキャミソール。わたしは自然と目を瞑った。服が脱がれていくごとに、部屋の空気が肌に直接触れて、ひんやりとして心地よかった。

「ことちゃん、すごくかわいい」

雄太の声が、近くで響いた。わたしのブラのフックを、彼は不器用に、でも丁寧に外した。そして、部屋着のズボンを脱がせて、パンツ1枚になる。

わたしはベッドの上で、自分がだんだん裸になっていくのを感じていた。羞恥と期待が混ざり合った、もどかしい感情だった。

「ん…！」

パンツがゆっくりと下げられていくと、足のつけ根に空気が触れて、わたしは小さく声を漏らした。

「大丈夫？」

「う…うん…♡」

雄太は膝の間で、わたしの体をじっと見ていた。彼の目が、熱い視線になって、わたしの全身をなぞっていた。

「ことちゃんのクリ、見たい」

彼の声は低く、耳元で囁くようだった。

「……♡」

わたしは答えられなかった。ただ、雄太が求めているものが何かは、わかっていた。

彼はゆっくりとわたしの脚を広げた。抵抗する力はなかった。わたしは雄太に完全に委ねていた。膝が曲がり、足の裏がベッドにくっついた。M字開脚。雑誌で見たような、誰かに見られているような体勢になった。

「ん…♡」

わたしの膣口が、冷たい空気に触れてじんわりと熱を帯びた。愛液が、少しずつ滲み出てくる。

「…濡れてる」

雄太の指が、わたしの陰唇を優しくなぞった。ぬるぬるとした感触が、彼の指先に伝わる。

「はぁ…♡」

わたしは息をのんだ。指が動くたびに、じゅわじゅわと快感が広がっていく。でも雄太は、わたしのクリトリスには触れなかった。ただ、陰唇の周りを、ゆっくりと、優しく撫でる。

「ゆう…くん…♡」

「ん？」

「もっと…♡」

「何を？」

「もっと…クリもなでなでして…♡」

雄太は少し笑った。そして、彼の顔が、ゆっくりとわたしの股間に近づいていった。彼の髪が、わたしの太もものに触れて、くすぐったかった。

「じゃあ、やるね」

彼の温かい息が、わたしのクリトリスに当たった。

「ひゃっ…！♡」

思わず、わたしの体が跳ねた。息の温かさだけでも、わたしは体が震えてしまう。

雄太は、そのままわたしのクリトリスの前に顔をうずめた。彼の舌が、ゆっくりと、わたしの陰唇を舐め上げた。

「あっ…♡」

舌の感触は、指とは全く違う。ぬめりがあり、温かく、柔らかい。陰唇を舐められるたびに、わたしの腰が自然と動いた。

「ん…はあん…♡」

雄太はわたしの反応を楽しむように、ゆっくりと舌を動かしていた。陰唇の両側を、上から下へ、ゆっくりとなぞっていく。舌先が、わたしの膣口に触れたかと思うと、また上に戻っていく。じゅるじゅる、と、少し湿った音が響いた。

「ゆうくん…んああ…！♡」

わたしはもう、我慢できなかった。声が漏れていた。恥ずかしかったけど、止められなかった。

雄太の舌が私のクリトリスを覆うように触れる。

「んあああああっ！♡」

わたしは思わず叫んだ。舌先が、わたしのクリトリスをくるくると舐めていた。

「んんん…！♡」

舌は自由自在に動いていた。くるくる、と、円を描くように舐めたり、しっかりと押し付けたり、軽く叩いたり。わたしの体は、もう雄太の思うままになっていた。

「んん…っ…♡ あっ…んあああ…！♡」

舌の動きがだんだん速くなっていく。じゅぷじゅぷ、と、音が響く。快感が、わたしの体の奥底からこみ上げてくる。わたしの腰が、勝手に動く。

「ゆうくん…ゆうくん…！♡」

わたしは彼の名前を繰り返した。

「んあああああああああっ！♡」

彼の唇が、わたしのクリトリスを吸った。

「ひゃああああっ！♡」

わたしの体が、びくり、と跳ねた。吸われる感触が、強すぎる。でも、心地いい。気持ちいい。

「ひあっ…んあああああ…！♡」

唇を離して、また舌が戻ってくる。吸って、舐めて、なでる。わたしのクリは、もうぐずぐずに溶けているような感覚だった。

「んん…はあ…はあ…♡」

わたしの息は、もう乱れていた。喘ぎ声も、もう我慢できなかった。

雄太の舌が、わたしのクリトリスの小さな粒を、ぱくりと咥えた。

「ひゃっ…！♡」

わたしの体が、びくん、と痙攣した。唇で柔く囙まれたクリトリスが舌で、ぐりぐり、と転がされる。

「んんんんんんんっ！♡」

わたしはもう、何も言えなかった。ただ、快感に任せて、体を震わせていた。

雄太の舌が、わたしのクリトリスを、ひたすら弄ぶ。

「んあああああああああああっ！♡」

わたしの意識が、少し遠のいていく。快感が、わたしを飲み込んでいく。

雄太の舌は、わたしのクリトリスを、ひたすら責め続けていた。

「んんん…っ…♡」

わたしはもう、限界だった。イッてしまいそう。

「ゆうくん…！♡ イ、イク…♡」

雄太は、それを聞いて、さらに舌の動きを速くした。舌先が、わたしのクリトリスの一番感じるところを、ひたすらこする。

「んあああああああああああああああっ！♡」

わたしの背中が、弓のようにそった。わたしの体は、びくびく、と痙攣する。

「んあああああああああああっ！♡」

快感が、わたしの頭を真っ白にした。わたしの体は、ぴくぴくと震えていた。

「んん…♡」

わたしは、ベッドの上で、ふと息を切らした。雄太の顔が、ゆっくりとわたしの顔の上に現れた。彼の唇は、わたしの愛液で、ぬめり光っていた。

「ことちゃん、気持ちよかった？」

「…うん♡」

「ことちゃんがイッてるの、すごくきれいだった。今日から選手権の日までいっぱい頑張ろうね。」と、雄太はわたしの額にキスをした。

「うん」わたしは頷く。

「選手権までのモチベーションにするために、今日の成果を記録しておかないとね。」

「成果？」わたしは意味が分からず、雄太の顔を見る。

「ことちゃんのクリトリス、今の状態、とてもいい感じだ。剥き出しになって、充血もあって、艶々してる。これは選手権の準備が順調に進んでいる証拠だよ」

わたしは顔を赤くした。「え、写真撮るの…？」

「うん。スマホのホーム画面に設定したいんだ。毎日見る度に、俺が選手権でことちゃんを一番気持ちよくさせて優勝するんだって思えるように」

雄太はわたしのクリトリスが見やすいように、わたしの脚をさらに広げた。

「もうやだ…恥ずかしい…♡」わたしは顔を隠そうとするが、雄太は優しくそれを制した。

「大丈夫。ことちゃんのクリは世界で一番美しいから」

雄太はスマホを取り出すと、カメラを起動した。シャッター音が鳴り、わたしのクリトリスの剥き出しになった姿が、映し出される。

「ことちゃん、自分でクリの皮剥けるかな？上にキュって、指で持ち上げてみて。」雄太が指示する。

自分で大きく開いた足の間を見る。

そこには、ピンっと立った小さな丸いお豆が見える。

そのお豆の根本を指でキュッと引っ張り、ツヤツヤのクリトリスが雄太にきちんと見えるようにする。

カシャッ

雄太がスマホのシャッターを押す。

「うん、いいね。」

スマホの画面を見て、雄太が微笑む。

「見て」

雄太は撮った写真をわたしに見せた。見慣れない自分のクリトリス。わたしは顔を赤くした。

「すごく…エッチ…♡」

「うん。ことちゃんのクリは、エッチで、かわいくて、最高だ」

雄太は、その写真をスマホのホーム画面に設定した。ロック画面を解除すると、まっすぐに、わたしの剥き出しになったクリトリスが映し出される。

ベッドの上で、M字に足を大きく開き、自分の両手の指でクリトリスを剥いている。まるで、自分の指先でクリトリスを指差しているような格好だった。

「毎日、これを見て、頑張るよ」

雄太は、わたしの頬にキスをした。

そして、私のクリトリスにも、チュッ♡とキスをする。

「うん…♡」

わたしは小さく頷いた。選手権の日まで、雄太と一緒に頑張ろう。そう思った。